

犬を中に入れたことに對して怒るどころか、大歓迎という様子ではないか。やはり、獅子丸が「おかげ犬」だからだろうか——。

ひとしきり獅子丸を撫で回すと、藤次郎は調理場へ向かつてきた。低い仕切りの前に立つと、慎介に向かつて丁寧に一礼する。

「仕事中すみません、ちよいと挨拶させてくださいえ」

藤次郎は、後ろに従えていた若い男に目を向けた。男が一步前に出て、深く辞儀をする。「こいつは利々蔵きざうと申しまして、このたび、うちで世話をすることになった者です。魚河岸から買われていった魚がどう扱われているのか、いろんな店を食べ歩いて、見せているところなんです」

利々蔵は背筋を正して、慎介に向かい合った。目がぱちりとして、愛嬌のある顔立ちだ。「お初にお目にかかります。生まれも育ちも佃島つくだじま、先祖は東照大権現（徳川家康）さまが江戸入りなさる際に佃島へやってきた漁師でございます。先祖の名に恥じぬよう、江戸一番の魚の目利きを目指して、このたび恵比寿屋さんと修業させていただくことになりました。お見知り置きのほど、どうぞよろしくお願いいたします」

慎介は重々しくうなずいて、調理台の前に出た。

「藤次郎さんの下で学べば、魚の目利きだけでなく、人づき合ひも上手になるだろう。魚を見るのと同じくらい、人を見るのは大事なことだ。——まあ、おれが言うことじゃねえ

がよ」

「いえ、ありがとうございます。今後も、いろいろお教えいただきたいと思っております」

利々蔵はかしこまって頭を下げる。その背中を藤次郎が力強く叩いた。

「それが、この利々蔵、人づき合ひに関しちゃんかなかのものなんです。かつて江戸一番の目利きと謳うたわれていた亡き祖父さんにちなんだ、目利きの『利々蔵』と名づけられました。あちこちからいろんな話を聞き込んでくるもので、聞くことにちなんだ『聞き蔵』かと言われる始末で」

慎介は「へえ」と感心したように利々蔵を見やる。

「人の話をいろいろ聞いてくることは、それだけ人と交わって、相手に打ち解けてもらっているって証だ。たいしたもんだなあ」

藤次郎は自分が褒められたかのように胸を張って笑った。

「瀬戸物町の長屋に住まわされているんですが、木戸にかけられた木札の名前を見て『ききぞう』じゃなくて『りりぞう』かなんて思う者も多いそうで——」

利々蔵は神妙な顔でうなずいた。

「利々蔵と間違われることも多くございます」

藤次郎は苦笑しながらうなずいた。

「そんなわけで、こいつのことは『目利きの利々蔵』と覚えてやっておくんなせえ。間違っても、わざと別の呼び方をしてからかったりしちゃあいけませんぜ。大変なことになりますからね」

ちはると慎介は顔を見合せて首をかしげた。

名のことでからかうつもりなど毛頭ないが、もし、わざと別の名で呼んだりしたら、いったい何がどう大変なことになるのだろうか。

それ以上の仔細は語らぬまま、藤次郎と利々蔵は調理場の近くに陣取ると、時折首を伸ばして慎介の手元を見つめながら膳を食べ始めた。

まず利々蔵が鮪の刺身をひと切れ口に入れる。その直後、大きく目を見開いて、調理場へ顔を向けた。

「うめえ——こんなに美味しい鮪の刺身は初めてだ」

信じがたいものを見るような目で、慎介を凝視した。

「百川の仁平じんへいさんに勝るとも劣らぬ包丁の入れ具合だ。百川じゃ、下魚と言われている鮪を扱わねえが、もし仁平さんが鮪の刺身を引いたら——」

利々蔵は藤次郎に向き直った。

「兄い、食べ比べてみたくなりますね」

藤次郎は牡蠣の吸い物に箸をつけながら「そうだな」と応じている。

ちはるの耳に「百川の仁平」という言葉が残った。

藤次郎は、百川にも利々蔵を連れていったのか。

利々蔵は瀬戸物町の長屋に住んでいると言っていたから、同じ町内にある百川へよく出入りして、仁平と懇意にしているも何らかしくはないが——。

以前、魚河岸で会った時の仁平の冷たい眼差しが、まぶたの裏によみがえる。

——美味しい料理で客を呼ぶなどと言っているらしいが、しよせんは旅籠——朝日屋は、料理屋じゃねえんだ。口当たりのいい包み揚げで、多少の評判を呼んだらしいが、百川と同じ土俵に上されるだなんて夢にも思っくんじゃねえぞ——。

慎介に対する、鉄太の誤解は解けた。

だが、仁平の気持ちは変わっていないのだろうか。

今でも——いや、いつまでも、朝日屋など認めないと思いつけるのだろうか。

「おや、聞き耳の目利き、利々蔵さんじゃないか」

獅子丸を撫でていた客がこちらへ向かってきたかと思えば、それは戯作者げさくしやの風来坊茶々丸ふうらいぼくちや丸だった。朝日屋に客がまったく入らなかった頃、舌が肥えている識者に料理の品定めをさせて世間に評判を広めようとしたことがあったが、その際に評者を務めてくれた人物でもある。

「瀬戸物町の茶屋から、こちらへ回ってきたんだ。わたしと似た名前のおかげ犬が朝日屋

にいますと、早耳のさくらさんに聞いてね。何でも、今朝早くから、噂になっていたそうじゃないか」

茶々丸のための場所を空けながら、利々蔵は恐縮顔になる。

「おれが鉄太兄いから、おかげ犬の話を聞いたのは、昼ちよつと前だったんですが——さくらは長屋の井戸端や茶屋で、おれよりも早く耳にしたってわけですかい」

茶々丸は笑いながらうなずく。

「そんなに面目なさそうな顔をしなくてもいいだろう。朝早くから魚河岸で懸命に働いていたんだもの、犬の話など知らなくても恥じやないさ」

「へい。ですが、魚河岸から目と鼻の先のことなんで——」

「さくらさんが働く茶屋だって、朝日屋の目と鼻の先さ」

藤次郎が調理場の慎介に顔を向ける。

「さくらってのは、利々蔵の恋女房なんでさ」

慎介は感心したように利々蔵を見た。

「まだ若^わえのに、もう所帯持ちか。利々蔵さんは、いくつだい」

利々蔵はかしこまって「二十歳です」と答えた。

「女房のさくらは十八で、瀬戸物町にある『四季』って茶屋で働いております」

「あそこは、いい葉茶を使っている店だな」

慎介の言葉に、利々蔵は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「もしよろしかったら、一度さくらの淹れる茶を飲んでみてやっておくんませえ。いつか舌の肥えた方々を唸らせるような茶が淹れられるようになってえと、さくらは日頃から申しております」

慎介はうなずいて、ちはるを見た。

「今度、たまおと一緒に试试看か。おめえの学びにもなるだろう」

「はい！」

慎介は満足そうに口角を引き上げると、利々蔵に目を戻した。

「さくらさんにも、ぜひ朝日屋の料理を味わってもらいてえ。この通り、うちには女の料理人がいるもんでね。そのうち女の客も入ってくるかもしれないねえ。女の客の目から見た料理ってのを、さくらさんに教えてもらえると助かる」

茶々丸が「なるほど」と納得顔になった。

「年が明けて、暖かくなったら、女の泊まり客だつて訪れるかもしれないからな。箱根の関所を越えていくのは難儀でも、江戸への物見遊山なら気楽にできるといふ、近隣の女衆がいるかもしれない」

おふさが運んでいった酒を、利々蔵がすかさず茶々丸に注いだ。

「先日、川崎からの夫婦連れが茶屋でひと休みしていったと、さくらが申しております」

た。何でも、えらく元気なご内儀だったそうで。そのうち隣や向かいのかみさんとも一緒に江戸へまた来たいと話していたそうですから、茶々丸さんがおっしゃった通り、女だけの物見遊山もこれから増えるかもしれませんね」

利々蔵は藤次郎にも酒を注いだ。藤次郎はぐつとあおると、次の酒を受けながら小さく唸った。

「金に余裕のある女衆なら、荷物持ち兼用心棒の男を従えて、あちこち遊び歩くかもしれないなあ。魚河岸の女を見ていると、女は強えと心底から思うぜ」

利々蔵が訳知り顔で眉尻を下げる。

「鉄太兄に聞いたんですが——以前、勝手に漁師の真似事をして漁場を荒らしたやぐど者たちを引つ捕らえにいく時、魚河岸の姐さんたちは炊き出しやら身支度の手伝いやら、甲斐甲斐しく兄たちの世話をして、おつかねえ顔で『万が一にも負け戦となれば、あんたらの帰る場所はないよ』とおっしゃったそうで——」

藤次郎は、げんなりした顔で酒を舐めた。

「うちのお袋にも『しつかりおやり』と言われたが、おれたちを送り出した時の女衆には、鬼が乗り移ったんじゃねえかと思うくらいの氣迫があつたぜ。まるで女衆が槍や包丁を手にして戦いにいくみてえだった」

「女衆も腹をくくっていたんだろうな」

茶々丸がしみじみとした目で藤次郎を見た。

「もし万が一、男衆が無事に帰れなかった時に、跡を守る覚悟が決まっていたんだろう」

藤次郎は目を細めて茶々丸に酒を注いだ。

「おっしゃる通り、守っているようで、守られているんだけさ」

茶々丸は酒を飲み干すと、わつと声を上げて顔を伏せた。

「ああ、うらやましい。わたしには、魚河岸の女衆みたいに支えてくれる者なんていやしない。行き詰まっても、さくらさんみたいに助言を頼める者なんていやしないんだ」

突然うじうじと床に「の」の字を書き出した茶々丸に、みな戸惑う。

茶々丸は大きなため息をつくつと、床に両手をついて嘆いた。

「書けない——戯作者なのに、戯作が書けない——これ以上の不幸があるだろうか。わたしは、もう戯作者と名乗れないのか——では、明日から、いったい何者になればいいんだ!? 戯作を書く以外、これまで何もしてこなかったというのに——わたしに、いったい何ができるといふのだ!」

周囲の客たちが困り顔で茶々丸を見やる。料理と酒を楽しみたいのに、茶々丸の嘆き声が邪魔をしているのだろう。

藤次郎と利々蔵は、どう慰めたらよいのかかわらないというように顔を見合わせて、首を横に振っている。